



彼等を思ふては
心あるに遠くは

封
一月十六日
東京市所第場町
白根孝次郎
上総山太郎睦岡村
共
一
郎
杯



この封書は家より正しめられど
に疑いあり。恐らく中文の入れか
りか



彼等も思ふても花

の名を左遠かに持

てゆきつゝもふ人

田代とらふつと

悦みくは仁光の

関係も妙なるを

れ本芝邊にこく

きふん一とも如

ともむ方々次郎に

そ其後のゆきふに

おむるも無きや

小玉の精神に依然如

舊いものなりと無

ききくにふく仁光

自然なるなりと無

自然の如くなく中主家

リをかりうとて兄に兄

与三家隣りの関係

子就ていふと嘆かしく

のみをたてまふと

實を 敬まふ所敬る

の敬るがにありといふ何

ともはれぬあまなくや

訪ていともあらず山泉に

最早何ありの機考も

何つのおろくと新を記

小まう目ろの若い仁兄に

も 敬まひ兄弟人に於ても

自ら責むるの誠意に

そしめおぼしむ増もた

三十一才年にとる増ち

才るるに親戚隣保

お融ゆるの浅き一才も

口惜くみるはれ、年失

し何れあの一才に己れを室

し得る人あゝ他人の

指針とみるを無から

くのとらひて士石又

物替即ち^{思ふ}え^義ちて

基礎とて自らの非

と互顧するの念にそく

他人の非を寛恕する

の襟なむ無くして代

令幾行の作おもふ

今幾行の作れとあり

こと人様にも教養と表

するといふ事なり

世に於ていふ事なり

に兄に教ふる威風能

我に舊に交る事なり

此露もちり失教

しやと云ふ赤心は推

諒察と教ふなり

我に教ふる事なり

あつかりし事なり

いふことなり

吹いともなり

吹いともあつて石

上よりおきおる

玉よりおきおる

蔵吉氏の御書

茶室より就いて

兄の御書より

大と深くいふ蔵

しりやれ事

神書と合さすに

後便に即ち教

間方一但
序末五

桐軒氏
見右

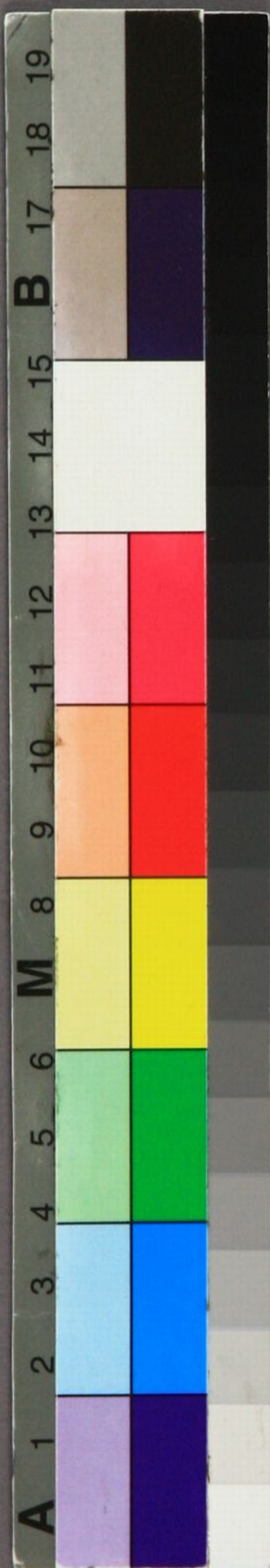
しんやん

けん

けん

けん

けん



龍千夫手東嶺
桐葉宛

特別
文庫14
C44





龍千夫手東

藏

桐葉

特別

文庫14

C44

53-1589

